

「霊障」……人々を惑わす言葉

聞き捨てならない言葉

霊魂の存在を信じている人々、あるいは「霊」とか「霊魂」に関心をもつ人たちがよく口にする「霊障」という言葉がある。

そうした人々の中に、心霊研究を行っているという心霊家(?)も加わってこの言葉を使用している。いかにも「心霊用語」らしく使い勝手がよいことから、多くの人々が利用するようになってきたようである。

しかし、この「霊障」という言葉は心霊科学やスピリチュアリズム(神霊主義)の用語としては認められていない。

われわれとしても、この言葉を用いる人たちは、一体どのような目的で一般の人々を誤らせ、惑わすのであろうか、大いにキナになるところである。かつて、この言葉を耳にしたとき、機関誌「心霊と人生」において、霊魂の本質を誤るもの、一般の人々を迷わせるものとして「巻頭言」に取り上げたことがある。

ところが、その後も、この言葉を心霊分野の指導者(?)とされる人たちが口頭で住ませるだけではなく、何の反省や躊躇もなく、文章の中で使用し、しかもハッキリした意味の説明をすることもなく平気で用いていることを知るにつけ、そのままに放置できないという気持ちで今回も取り上げることにしたわけである。

困ったことに、この言葉は、それなりの理解で納得し易いようでもある。

手近にある「言海」で「障り」の意味を見てみると(言うまでもなく、「霊障」という言葉は取り上げられていない)、<名詞>①害となる、②あたる、③気を感じて身を病むこと、とある。(「自動詞」の場合も、同じようなことが説かれている)

要するに“霊の障り”であるので、①霊が害する、②霊という気を感じて病む、という意味となろうか。さらには、ある人に、特定の霊が働いて、何か故障を起こさせる、病にさせる、というのである。“障り”力を持った霊そのものの働きを指しているのである。

病治しの宗教宗団で使い始めた言葉

実は、70~80年前にもなろうか、「K教団」という“病気治し”の宗教法人があった。その機関誌で、教祖“O某”が、題名はうろ覚えであるが、たしか「自観」とか表現し執筆していたように思う。もちろんのこと、どの教団でも、PR誌というより、“おかげ(利益)集”といった方が適切かも知れないが、そこでは、この「霊障」に加えて「御

浄霊」という言葉が用いられていたと思う。

この“O某”という人物は、元大本教のどこか地方支部の責任者で、そのために、霊魂の働きについては“大本教式”に説いていた。したがって、浄霊という文字からも判るように、“霊魂を浄化させる”とか、“霊が障る”と言った霊の意味で、その“障るもの”を“除く”とか“障る霊”を“浄化”させることで病気が治ると言っているわけである。そうした障るものを除くとか、浄化させる神力(?)は実際には教祖の力以上の持ち主は存在しない。そして、その教祖の身代わりになるのが、このお守り(?)だとして、“お光り”というものの講習を通して売りさばっていた。

その後、全国いたるところで少し霊能のありそうな人物が現れ、これと同様のやり方で、その障るものを出したり、除いたりすることで、これも唯一教祖の教えに基づいた方法を採用し、宗教教団の名の下に、また、大教祖(「聖師」といったか)の名を使って行っていた。

その後は、大掛かりなPRで関西から関東へ進出したグループもあり、これに対抗するグループが、互いに他教団とか教祖としてのぎを削っているようである。そうしたグループから、この“霊障”という言葉が流行語のように使用されるようになった。また、これを聞き、その除霊(?)を行って“障る霊”を出してくれる、除いてくれるということで、病気が治った、ある障害が除かれたという、あることないことを含めたPRが、この言葉の一層の定着に貢献しているようである。

災いの根本が“霊”そのものか

これらのグループ(教団、宗教法人)では、“神”、“仏”に当たるのは、その教祖である。また、教祖も心得たもので神仏になりすましている。また、その周囲の人たちもサクラか、何かご利益があったことからか、その教祖を神様、仏様と信じている。この教祖が、人間には“霊魂”が働いていると説くのである。もちろん、病気を含め、すべての不幸、不運は、ある霊魂が働いているから生じるのだという。

これは、もはや、一般人の中でも、宗教とか信仰生活におけるご利益をひたすら祈願する信者達の常識である。それらの人々は“因縁”によって、あるいは悪霊が働いて苦しめられる。したがって、それは因縁の霊だと決めてかかる。こうした人々、そのグループでは、相手が“霊”であり、その霊を浄め、除けばよいということにのみ心を向けること、それ以外には何も知らない。

要するに、グループ全体の人々は、教祖あるいは霊媒の口から出ることをそのまま信じており、あくまでも不幸、禍いの根元は“霊”であると思い込んでいる。

宇宙の法則に生きよ

このように、浄霊、霊障という言う人々の理解は、それで正しいのか、間違いなのか。まず、この人に障りをしてやろう、病にさせよう、重患にさせてやろう、禍いを起こさせてやろうという、そういう霊魂が実際働いていたのか。それとも働いていないのに、いかにも居るように騙してはいないかという疑問がある。これがまず第一にハッキリさせなければならない点である。その次の疑問が、たしかに、そうした霊が憑いていたとして、一体、その霊の方からやってくることで、目的の人に憑いて被害を被らせようとしていると思わされているのではなからうか。

これらに関する正しい回答は、心靈科学の上に立った霊魂研究によると、霊自らが憑いたというのは間違いで、実は被害者である人間の方がこちら側へ呼んでいるのである。すなわち、この霊障者といわれている人自らが呼んだのである。また、子どもの場合には、若干異なって、その多くは親が呼んだのである点を明らかにしている。

したがって、これらの霊魂を呼ぶことも、去らせること、去ることも、すべて、宇宙の法則、霊界の法則である「波長説」に基づいているわけで、これ以外に当てはまる法則はなく、また例外もない。一方で、霊自らやってきたという人もいるが、こうしたケースがあるとすれば、そうした心の波が本人（霊障者）にあったからやって来た、交霊したということである。

まして、一般にいわれる“因縁”の場合には、その人、あるいは、その祖先の誰かが、生前、殺したり、苦しめたりして、因縁霊とさせてしまった経緯があることが多い。そして、その恨みから復讐をしようという目的で、子孫を苦しめ、あるいは殺してしまおうと行動を起こすことにもなる。しかし、この場合は、対象となる子孫の誰かに、この心の波と同調する心をもつ者がいると、親和の法則にしたがって取り憑き、憎しみの思いをその子孫に働きかけて不幸や禍いを与えることができる。それに対して、もし、子孫の内に、その憎しみと同じ波長の持ち主がいなければ、この因果律、因縁は成立しない。言うなれば、因縁霊は働こうにも働けない、憑くことができない。

そうした波長説は法則であるだけに絶対である。宇宙の法則は神が創ったものである。神もこれにはどうにもできない。それを神、仏のようなという位になればまだよいとして、自らが神なり仏なり聖師なりと名乗ったところで、それは言うだけのことで、事実としてこの因果律を、この因縁を除き去ることはできないのである。

しかも、そうした神だ、仏だ、聖なる人間だといって、その霊の力で、障霊（憑依霊）を無理矢理に除いたとしても、それが“永久に”というわけにはいかない。当然のこと、

障霊の方も満足するはずもない。一時的に強制的に除かれたとしても、必ず再度、それ以上の苦しみを与える方法を考えて憑くチャンスを狙う。

霊魂研究の必須性

除霊という方法によって、第三者は、その本人から障霊は出された、除霊されたと信じる。何か、形の上でそうした方法がとられ、いかにも除かれたと信じさせられるかもしれないが、それは、その教祖とか霊媒の背後霊の芝居か、あるいはそれが単なる形式であり、実は除霊どころか、むしろ、そんな霊は働いていない、存在していなかったのかも知れないという可能性もある。こんな場面は実際にある。要は、それら関係者の背後霊が問題になることを、一般の人々は判らないし、見抜けないのである。

このように考えてくると、霊に関する学問、霊魂研究による常識をもつことは重要であり、ことに霊の働きに関心を持つ人々にとっては、これら霊に関する知識を得ることが必須であることを知るべきである。

ところで、霊魂研究という学問は、人間に対して何を教えているのであろうか。

結論からいえば、霊魂研究から得られた霊に対する基礎的知識を応用し、各自は自らの霊（自我霊）を向上させ、高い霊界にいるわれらの守護霊に近づくための精進することであると言っている。すなわち、自らの向上心を、高い神霊に向けることである。この精進こそは、日本人としては日本神霊主義（日本スピリチュアリズム）の実践に他ならないのである。